

	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912
Adler	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
Freud	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56

『神経質性格について』発表  
精神分析協会を去る／精神分析  
学の諸問題「男性的講義」/  
オーストリアの市民権得る

『人生と神経症における両性  
具有性』／精神分析協会の議  
長『精神分析中央雑誌』  
(副)編集長に

コルネーリア誕生

『器官劣等性の研究』

『プロテスタントに改宗』発表  
「教育者としての医者」発表

『いろいろな医学雑誌などに  
論文発表』／クルト誕生

フロイトが4人をさそって  
水曜夜の会をはじめ  
H・グリューンの医学雑誌  
に寄稿はじめる

アレクサンドラ誕生

フロイト『夢判断』の発表

一九一〇年にアドラーは心理的な男女同体  
についての理論を提起した。経験の示すとこ  
ろによれば、神経症患者の中には自分と反対  
の性の二次成長が目立って高頻度に見出され  
る、と彼は言う。このことが患者に主観的な劣  
等感を起こさせ、患者は男性的抗議の形で  
代償を求めて努力することになる。

『無意識の発見(下)』頁二二七二二

一九〇八年ごろには、アドラーはすでにリ  
ビドーを心的活動の主要な力動源とするフロ  
イトの基本概念に異論を唱えていた。彼はリ  
ビドーの欲求不満から生じたものとしては説  
明のつかない攻撃欲動が存在し、それは正常  
な人生でも神経症でもリビドーに劣らない重  
要な役割を演じるものだということを主張し  
た。

『無意識の発見(下)』頁二二七

彼の器官劣等性の理論は精神分析グループか  
ら好意的に迎えられた。フロイト自身も、これ  
を神経症の知識に対する有益な補足とみなし  
ていたようである。

『無意識の発見(下)』頁二二七

この時期にアドラーが発表した多数の論文  
のうちでも、二つの論文が特に強く精神分析  
的色彩を帯びている。二つとも一九〇五年に  
発表されたもので、一つはフロイトの『日常  
生活の精神病理』のスタイルで三人の患者に  
おける数字脅迫の意味を説明しようとした  
もの、もう一つは教育における性的問題につ  
いて、フロイトの『性学説三論』に似た手法で  
幼児性欲の問題を論じたものである。

『無意識の発見(下)』頁二二六

一九〇四年の七月から八月にかけて連載さ  
れた「教育者としての医者」という長文の論  
説では、彼の思想の新しい一面が述べられて  
いる。(中略)

この論説は、アドラーが一九〇四年にす  
でに彼の教育理論を完成させていたことを  
示すものであって、そこから彼一流のいくつ  
かの考え、たとえば器官劣等性の役割、甘や  
かされた子どもの姿、自信と勇気の治療的意  
義などについての初期の陳述をみてとるこ  
とができる。

『無意識の発見(下)』頁二二四二二